

ChatGPTにおける「ジブリ風」画像生成の制限に関する調査報告書

1. エグゼクティブサマリー

本報告書は、OpenAIのChatGPTおよびその基盤となる画像生成モデル(DALL-E等)において、以前は可能であった「ジブリ風」画像の生成が最近になって困難または不可能になったとされる現象について調査し、その背景にある要因を分析するものである。ユーザー報告やメディア報道に基づき、この制限は単一の原因によるものではなく、複数の要因が複合的に作用した結果である可能性が高いと結論づける。

主な要因としては、(1) OpenAIによる知的財産権(IP)侵害リスクを低減するためのコンテンツポリシーの進化と適用強化、(2)「スタイル」自体の著作権保護は現行法上限定的であるものの、特定の著名なスタイル模倣が出力結果において著作権侵害を引き起こすリスク、(3) AIによる特定アーティストやスタジオの作風模倣に関する倫理的・社会的な懸念の高まり、(4) 当該機能の爆発的な人気に伴うサーバー負荷問題と、それに続くリスク評価および対策の実施、が挙げられる。

これに対し、「日本のアニメ風」といったより一般的なスタイルの生成が引き続き可能である点は、特定の権利者との直接的な紐付けが弱く、IP侵害リスクが相対的に低いと判断されているためと考えられる。本報告書では、これらの要因を詳細に分析し、ChatGPTにおける「ジブリ風」画像生成制限の背景にある複合的な力学を解明する。

2. ChatGPTにおける「ジブリ風」現象の経緯

2.1. 初期の生成能力と爆発的な人気

ChatGPTは、特に2025年初頭のアップデート(GPT-4oのリリースなど)以降、画像生成能力を大幅に向上させた¹。このアップデートにより、テキスト指示に基づいて高精度な画像を生成する機能が強化され、多くのユーザーが画像生成を試みるようになった¹。

その中でも特に注目を集めたのが、「ジブリ風」画像の生成機能であった。ユーザーが自身の写真やペットの画像をアップロードし、「ジブリ風にして」といった簡単なプロンプトを入力するだけで、スタジオジブリ作品を彷彿とさせる特徴的なスタイルのイラストが生成される手軽さが受け、SNSを中心に急速に拡散した¹。著名人や一般ユーザーが生成した画像を次々と投稿し、大きな話題となった¹。OpenAIのCEOであるサム・アルトマン氏自身も、自身のX(旧Twitter)アイコンにChatGPTで生成したとされるジブリ風の画像を使用していた時期があり、これがさらなる注目を集める一因となった¹。

2.2. サーバー負荷と初期の制限

しかし、この「ジブリ風」画像の生成機能は、予想をはるかに超える人気を集めた結果、OpenAIのシステムに想定外の技術的課題をもたらした。特に、無料ユーザーへの新画像生

成機能の展開時期と重なり、アクセスが殺到した³。

この爆発的な需要により、GPU(画像処理装置)をはじめとするサーバーリソースが極度に逼迫する事態が発生した。CEOのサム・アルトマン氏がXで「GPUが溶けている」と冗談めかして投稿するほどの状況であったと報じられている⁶。この高負荷に対応するため、OpenAIは一時的にレート制限(利用回数制限)を導入し、無料ユーザーへの新機能提供を延期せざるを得なくなった³。

この経緯を考慮すると、ユーザーが最初に「ジブリ風」画像の生成ができない、あるいはしにくいと感じた状況は、必ずしも恒久的なポリシー変更によるものではなく、純粹に技術的なキャパシティの問題、すなわちサーバーリソースの逼迫による一時的な利用制限が直接的な原因であった可能性が高い。

2.3. 生成不可・困難になったとのユーザー報告

一時的な技術的制限の後、ユーザーからは「ジブリ風」という特定のスタイルを指定した画像生成が以前のようにできなくなった、あるいは完全にブロックされるようになったという報告が挙がるようになった(ユーザーの当初の質問、および⁷で言及されているミーム拡散後の規制強化)。これは、初期の技術的なアクセス制限とは別に、より意図的な、ポリシーに基づいた制限が導入された可能性を示唆している。

この「ジブリ風」機能の爆発的な人気とそれに伴う技術的問題は、結果的にOpenAIに対して、この特定の高风险なスタイルプロンプトに関するポリシーを見直し、より厳格な制限を導入する契機となったと考えられる。多くの注目を集めたことで、潜在的な著作権や倫理的な問題点がクローズアップされ、技術的な安定確保と並行して、ポリシー面での対応を加速させる必要性が生じたと推察される。

3. アーティストスタイル複製に関するOpenAIのポリシー状況

3.1. 一般的なコンテンツポリシー

OpenAIは、そのサービス利用規約において、他者の知的財産権を侵害するコンテンツの生成を禁止している⁷。これには著作権や商標権の侵害が含まれる。また、ヘイトスピーチ、暴力、アダルトコンテンツなど、有害なコンテンツの生成も禁止されている⁸。これらのポリシーは、DALL-Eを含む画像生成サービスにも適用される¹¹。

3.2. アーティスト・スタイル模倣に関するポリシー

特定のアーティストやスタジオのスタイル模倣に関しては、OpenAIのポリシーはより nuanced (微妙な差異を含む)なものとなっている。

- 特定名称の使用回避: 著作権や肖像権侵害のリスクを低減するため、プロンプトに特定のアーティスト名、キャラクター名、ブランド名、実在の人物名などを含めることは、可能な

限り避けるべきであると示唆されている¹²。

- 近現代アーティストの制限: 直近100年以内に制作活動を行った、あるいは存命中のアーティストのスタイルを直接参照・模倣することは避けるべき、あるいは禁止しているとの情報がある¹⁵。
- 「ジブリ風」「ディズニー風」の扱い: これらの特定のスタジオ名を冠したスタイル指定は、強力なIPとの関連性から、ポリシー違反となり得る可能性が示唆されている⁷。
- スタジオ vs 個人: 一方で、「存命中の個別アーティストのスタイル再現は禁止している」が、「スタジオ全体のスタイルは許容している」という説明も存在する⁴。しかし、この区別は曖昧さを伴う。
- DALL-E 3のドキュメント: DALL-E 3に関する資料では、著作権の関係で、スタジオジブリの正確なスタイルを模倣した画像の作成は制限されることがある、と具体的に言及されている¹⁷。

3.3. gpt-image-1 APIの文脈

OpenAIは、ChatGPTで人気を博した画像生成機能を、開発者向けにAPI「gpt-image-1」として提供開始した⁹。このAPIも、ChatGPT本体と同様の安全ガードレールやコンテンツモデレーション(内容審査)の仕組みを備えている⁹。

画像生成機能が正式なAPIとして提供されるにあたり、開発者が安全かつ予測可能な形で利用できるよう、コンテンツポリシー、特に「ジブリ風」のような注目度が高くリスクも高いと認識されたスタイルプロンプトに関するポリシーの適用が、より明確化・厳格化された可能性は高い。APIという形で第三者に機能を提供する以上、潜在的な法的リスクやブランドリスクを管理する必要性が高まるためである。このAPI提供開始の動きが、ChatGPT本体における同プロンプトの扱いにも影響を与えたと考えられる。

3.4. ポリシー適用の曖昧さと変化

ポリシーの適用は、時に一貫性を欠くように見えたり、時間とともに変化したりすることがある。「ジブリ風」に関する制限が、爆発的な人気の波の後に強化されたように見えるという観察⁷は、ポリシーが状況に応じて見直され、適用が調整されていることを示唆している。

特に、「スタジオ全体のスタイル」と「それを代表する個々のクリエイター(特に宮崎駿氏のような象徴的な存在)のスタイル」を明確に分離することの難しさが、ポリシー適用の曖昧さを生んでいる可能性がある⁴。スタジオジブリのスタイルは、宮崎駿氏や他の主要クリエイターの芸術性と不可分に結びついているため、「スタジオスタイルはOK、個人スタイルはNG」という区別を適用することが実際には困難である。この曖昧さに伴う法的・倫理的リスクを考慮すると、OpenAIがより保守的なアプローチ、すなわち「ジブリ」という特定の名称を含むプロンプト自体を制限する方向に舵を切ったことは、リスク管理の観点から合理的な判断と言える。

4. AI生成における著作権とスタイルの問題

4.1. 「スタイル」の法的地位

著作権法に関する一般的な原則として、特に日本の文化庁の見解によれば、アイデアやコンセプト、あるいは「作風・画風(スタイル)」自体は、具体的な「表現」とは区別され、通常、著作権による保護の対象とはならないとされている⁴。著作権が保護するのは、思想や感情が具体的に創作的に表現されたものであり、抽象的なスタイルそのものではない。

4.2. 著作権侵害の要件

著作権侵害が成立するためには、一般的に、(1) 既存の著作物との「類似性」と、(2) 既存の著作物に依拠して(参照して)創作されたこと(「依拠性」)の両方が認められる必要がある¹⁹。単にスタイルが似ているだけでは、直ちに著作権侵害とはならない。

4.3. AIがもたらす著作権への挑戦

AIによる画像生成は、この従来の著作権の枠組みに新たな課題を突きつけている。AIモデルは、膨大なデータセット(著作物を含む可能性がある)を学習して構築されるため、その生成プロセスには学習データへの「依拠性」が内在していると解釈されうる¹⁹。

ユーザーが「ジブリ風」というスタイルを意図してプロンプトを入力した場合、AIはその指示に基づき、学習データの中からジブリ作品に関連する特徴(色彩、構図、キャラクターデザインのパターンなど)を抽出し、新たな画像を生成する²⁰。このプロセスにおいて、AIが単に抽象的なスタイルを再現するだけでなく、意図せずとも学習データに含まれていた特定の著作物(例:特定の映画のシーン、キャラクター)と酷似した「表現」を生成してしまうリスクがある²⁰。

このようなAI生成物が、既存のジブリ作品と高い「類似性」を持ち、かつAIの学習プロセスとプロンプト指示によって「依拠性」も認められる場合、著作権侵害と判断される可能性がある。したがって、OpenAIが「ジブリ風」というプロンプトを制限する背景には、「スタイル」自体が保護対象でないとしても、そのスタイルを模倣しようとするプロセスが、結果的に著作権侵害となる「表現」を生み出すリスクが高いという判断があると考えられる。これは、侵害リスクのある具体的な出力を未然に防ぐための予防的な措置と解釈できる。

4.4. スタジオジブリの公式見解

AIによる「ジブリ風」画像の生成に関して、スタジオジブリは、メディアからの取材に対し、「現時点ではコメントはありません」という立場を維持している⁴。

この「ノーコメント」という姿勢は、必ずしも現状を容認していることを意味するわけではない。むしろ、将来的な法的措置を含むあらゆる選択肢を留保する中立的な立場と解釈するのが妥当である。OpenAIの観点からは、明確な許諾やガイドラインが存在しない以上、世界的に有名なIPホルダーであるスタジオジブリのスタイルを扱うことは、潜在的な法的リスクや評判リスクを伴うと判断し、慎重なアプローチを取る一因となっていると考えられる。

4.5. OpenAIのフェアユースに関する立場

一方で、OpenAIはAIの学習における著作権データの利用に関して、「フェアユース(公正な利用)」の重要性を主張しており、著作権保有者が全ての学習利用を制限できるようになれば、AI産業全体が不利益を被るとの立場を示している²⁰。これは、AI開発の推進と既存の著作権保護との間で、現在進行中の法整備や解釈を巡る議論の一側面を示している。

5. AIによるスタイル模倣の社会的・倫理的側面

5.1. 高まる議論

AI技術が人間のアーティストのスタイルを容易に模倣できるようになったことで、その倫理的な是非を問う議論が活発化している²³。これは、技術的な可能性の拡大と、クリエイターの権利、オリジナリティ、そして労働の価値といった問題との間の緊張関係を反映している。

5.2. アーティストへの影響

特定のアーティストやスタジオのスタイルがAIによって大量に、かつ安価に複製されるようになると、オリジナルのアーティストの作品価値が相対的に低下したり、模倣品が市場に出回ることによって経済的な機会が奪われたりするのではないかという懸念が表明されている²³。また、AI生成物が人間の手によるものと見分けがつかなくなることで、作品の真正性や作者性に関する問題も生じる²³。実際に、生成AIによる画像の使用に反発してイベント出演を辞退するアーティストや²⁴、生成AI推進に批判的な立場を表明するクリエイティブツール企業²⁴など、クリエイターコミュニティからの反発や懸念の声も上がっている。

5.3. プラットフォームの責任

このような状況下で、OpenAIのようなAIプラットフォーム提供者には、技術提供に伴う倫理的な責任が問われるようになっている。単に技術的に可能なだけでなく、その技術が社会やクリエイターに与える影響を考慮し、適切なガードレールを設けることが求められている。文化庁がサービス提供者に対して知的財産権侵害リスク回避のための技術採用を推奨しているように¹⁹、プラットフォーム側にも対策を講じる社会的圧力が存在すると言える。

OpenAIが「ジブリ風」という、世界的に愛され、芸術的にも高く評価されている特定のスタイルを制限する決定を下した背景には、厳密な法的要件を超えて、倫理的な配慮や企業としての評判管理(レピュテーションマネジメント)の意図が含まれている可能性も否定できない。著名で象徴的なスタイルの模倣を制限することは、AIを取り巻く倫理的な懸念に対して、企業が配慮している姿勢を示す一つの方法となりうる。

6. 特定スタイルと一般ジャンルの区別

6.1. ユーザーの観察の再確認

ユーザーが指摘するように、「ジブリ風」という特定のスタイル指定は制限される一方で、「日

本のアニメ風」というより一般的なジャンル指定は引き続き可能であるという状況が観察されている。

6.2. 技術的な実現可能性

AIシステムは、プロンプトに含まれる単語やフレーズの具体性のレベルに応じて、異なる処理を行うように設計・調整することが技術的に可能である。「ジブリ」のような特定の固有名詞を含むプロンプトを検出しフィルタリングする一方で、「アニメ」のような広範なカテゴリを表す用語は許可するという区別は、システム的に実装可能である。

6.3. ポリシーおよびリスクの区別

この区別がなされる理由は、主として知的財産権(IP)に関連するリスクの度合いの違いにあると考えられる。

- **IPリスクの集中度:**「ジブリ風」という言葉は、スタジオジブリという単一の主体、およびその主体が保有する価値の高いIP(キャラクター、映画作品など)と強く結びついている。このため、「ジブリ風」プロンプトは、特定の権利者からの著作権侵害の申し立てや、その他の法的措置に繋がるリスクが非常に高い(集中している)と言える⁷。
- **一般ジャンルの性質:** 対照的に、「日本のアニメ風」は、無数のクリエイターやスタジオによって制作された膨大な作品群を含む、広範なジャンルを指す言葉である。この「スタイル」自体に単一の明確な権利者は存在せず、関連するIPリスクは分散しており、特定のプロンプトに対する直接的な法的リスクは相対的に低い。
- **商標の考慮:** スタイル自体は著作権の対象外であっても、「ジブリ」という名称自体が商標として保護されている可能性があり、その名称の使用を避けるという意図も考えられる。

したがって、「ジブリ風」と「日本のアニメ風」の扱いの違いは、本質的には知的財産権リスクの集中度の差に基づいたリスク管理戦略の結果であると言える。「ジブリ」という名称が、単一の主体が権利を持つ明確に定義された作品群への直接的なポインターとして機能するのに対し、「日本のアニメ」は多様な権利者が存在する広大なジャンルを指す記述的な用語に過ぎない。OpenAIのポリシーとフィルタリングシステムは、このような高リスクが集中する特定のプロンプトをターゲットにするように設計されている可能性が高い。

7. 他AIプラットフォームとの比較分析

7.1. 業界全体の文脈

著作権やスタイル模倣に関する課題は、OpenAI/ChatGPTに限らず、画像生成AI業界全体が直面している問題である²³。例えば、大手ストックフォトサービスのGetty Imagesは、法的リスクへの懸念から、Stable DiffusionやMidjourneyなどのAIで生成された画像のアップロードと販売を禁止した事例がある²⁶。

7.2. プラットフォーム別のアプローチ

主要な画像生成AIプラットフォームが、著名なアーティストやスタジオのスタイルを指定するプロンプト(例:「ジブリ風」)に対して、どのようなポリシーを持ち、どのような挙動を示すかは、プラットフォームによって異なる。

AIプラットフォーム	ポリシー概要・関連情報	「ジブリ風」生成の状況 (報告ベース)	背景・理由(推測含む)
ChatGPT (DALL-E)	IP侵害禁止。特定アーティスト/ブランド名使用は非推奨 ⁷ 。DALL-E 3ではジブリの正確な模倣は制限対象 ¹⁷ 。	当初可能だったが、現在は制限されているとの報告多数 ⁷ 。	IPリスク管理、ポリシー適用強化、倫理的配慮、サーバー負荷問題からの波及。
Midjourney	生成画像の権利は作者+Midjourney AIに帰属。商用利用には注意が必要 ²⁷ 。	多様なスタイル生成が可能 ²⁸ 。特定の「ジブリ風」プロンプトがブロックされるかは、提供情報からは不明確。	ユーザーによる多様なスタイル探求を許容する傾向か。ただし、IPに関する一般的な懸念は存在する ²⁶ 。
Stable Diffusion	オープンソースの性質上、中央集権的な制限は少ない可能性 ¹⁰ 。ただし、ライセンスで利用制限が課される場合あり ³⁰ 。	モデルや設定により多様なスタイル生成が可能。ユーザーが法的責任を負うリスク。	分散型・オープンソースのため、プラットフォームレベルでの一律な制限はかけにくい。IPに関する一般的な懸念は存在する ²⁶ 。
Adobe Firefly	IPに配慮し、権利クリアなデータで学習。商用利用を想定。	「ジブリ風」のような特定の著名スタイルプロンプトはブロックされると報告されている ⁷ 。	設計思想としてIPコンプライアンスを重視。法的リスクを最小化する方針。

表1: 主要AIプラットフォームにおける著名スタイル生成に関する比較

OpenAIが「ジブリ風」プロンプトを制限する決定を下したことは、知的財産権に対する懸念の高まりという、より広範な業界トレンドに沿った動きであると言える。ただし、具体的な制限の実施レベルや適用方法はプラットフォーム間で異なっている。Adobe Fireflyのように、当初からIPコンプライアンスを重視し、より厳格な制限を設けているプラットフォームもあれば、MidjourneyやStable Diffusionのように、アーキテクチャの違いなどから異なるアプローチを取っている(あるいは、より緩やかな制限となっている)プラットフォームも存在する。OpenAIの動きは、当初の寛容な姿勢から、リスク管理を重視する方向へとシフトしたことを示している。

8. 結論：制限の背景にある複合的要因の統合

ChatGPTにおいて「ジブリ風」画像の生成が困難または不可能になった現象は、単一の出来事やポリシー変更によって引き起こされたものではなく、技術的、政策的、法的、倫理的な複数の要因が複合的に作用した結果であると結論付けられる。

その因果関係の連鎖は、以下のように推察される。まず、機能の目新しさと質の高さから「ジブリ風」生成が爆発的な人気を獲得した¹。これが予期せぬサーバー負荷増大を招き、一時的な利用制限が必要となった³。この注目度の高まりと利用制限期間が、当該機能に伴う潜在的なリスク、特にスタジオジブリという特定の権利者に関連する著作権侵害リスクや、スタイル模倣に関する倫理的問題を顕在化させた。

これを受けてOpenAIは、知的財産権侵害を防止するための既存のコンテンツポリシーを、「ジブリ風」のような高リスクなプロンプトに対してより厳格に適用・強化する方向に動いたと考えられる⁷。この決定は、「スタイル」自体の著作権保護に関する法的な曖昧さ⁴、将来的な法的紛争の可能性（スタジオジブリの「ノーコメント」姿勢が示す不確実性）、そしてAIによる著名スタイルの模倣に対する社会的な批判や倫理的な懸念の高まり²³を考慮した、予防的なリスク管理措置であったと解釈できる。

一方で、「日本のアニメ風」という一般的なジャンル指定が引き続き可能であることは、特定の権利者に紐づくIPリスクが低いという判断に基づいていることを裏付けている。

最終的に、OpenAIによる「ジブリ風」生成の制限は、AI業界において共通して見られる、技術革新とユーザーエンゲージメントの推進と、複雑な法的枠組みの遵守、運用コストの管理、倫理的責任への対応、そして知的財産に関連する重大なビジネスリスクの軽減という、複数の要請の間でバランスを取ろうとする動的なプロセスの一例であると言える。「ジブリ風」の事例は、これらの競合する力が、プラットフォームによる特定の機能制限という具体的な結果をもたらした顕著なケースとして位置づけられる。

引用文献

1. ChatGPTでジブリ風画像を3分で生成！初心者でもできる作り方＆注意点について詳しく解説！, 4月 25, 2025にアクセス、
<https://weel.co.jp/media/innovator/chatgpt-ghibli/>
2. GPT-4oの活用事例10選！目と耳を手に入れたマルチモーダルLLMの使い方を徹底解説 | WEEL, 4月 25, 2025にアクセス、
<https://weel.co.jp/media/innovator/gpt-4o-usage-examples/>
3. ChatGPTの新画像生成、利用急増で無料ユーザー向け延期「GPUが溶けてる」とCEO - ITmedia, 4月 25, 2025にアクセス、
<https://www.itmedia.co.jp/news/articles/2503/28/news135.html>
4. 「ジブリ風」の生成AI画像をChatGPTなどで世界中の人が作成 ..., 4月 25, 2025にアクセス、
https://www.huffingtonpost.jp/entry/story.jp_67e618dee4b0da7de4274676

5. ネットにあふれたAI製「ジブリ風画像」——最近の事例から考える「AIに学習されない自由」: 小寺信良のIT大作戦(1/2 ページ) - ITmedia NEWS, 4月 25, 2025にアクセス、
<https://www.itmedia.co.jp/news/articles/2504/11/news144.html>
6. GPU溶ける～OpenAI本社ドタバタ劇場～ | 石川書道教室 - note, 4月 25, 2025にアクセス、
https://note.com/ishikawa_syodo/n/nb64bc77b2d33
7. Ghiblifyの違法性について調べてみる - Zenn, 4月 25, 2025にアクセス、
<https://zenn.dev/banboobloom/articles/2025033100001>
8. DALL・E 3は商用利用できる？認められないケースや注意点も徹底解説！ - AI Market, 4月 25, 2025にアクセス、
<https://ai-market.jp/services/dalle-3-commercial/>
9. OpenAI - GPT Image API の概要 - Zenn, 4月 25, 2025にアクセス、
https://zenn.dev/ml_bear/articles/c957977829d43f
10. 画像生成AIサービスを比較してみたStable Diffusion 対 DALL・E | Tkrite inc. - note, 4月 25, 2025にアクセス、
<https://note.com/tkrite/n/n30c8a815a62c>
11. 利用規約 - OpenAI, 4月 25, 2025にアクセス、
<https://openai.com/ja-JP/policies/row-terms-of-use/>
12. 【デザイナー必見】画像生成AIの商用利用 | 著作権リスクと安全な活用法を徹底解説 | KAWAI, 4月 25, 2025にアクセス、
<https://note.com/kawaidesign/n/nfdff006519e8>
13. AI生成コンテンツの商用利用における著作権・倫理問題 | せきとば ~ChatGPTと暮らす日々~, 4月 25, 2025にアクセス、
https://note.com/life_chatgpt/n/n5e1df8677cc1
14. 【商用利用もOK】ChatGPT画像生成 | 著作権対策と活用法 - Hakky Handbook, 4月 25, 2025にアクセス、
<https://book.st-hakky.com/data-science/commercial-use-chatgpt-image/>
15. ジブリ風AI画像がSNSで大流行 | ChatGPTの画像生成と著作権問題を徹底解説 - Multifverse, 4月 25, 2025にアクセス、
<https://www.multifverse.com/blog-posts/chatgpt-ghibli-style>
16. ChatGPTとDALL-E3のコンテンツポリシーについて - インターテックリサーチ株式会社, 4月 25, 2025にアクセス、
<https://www.itrco.jp/wordpress/2023/10/chatgpt%E3%81%A8dall-e%E3%81%AE%E3%82%B3%E3%83%B3%E3%83%86%E3%83%B3%E3%83%84%E3%83%9D%E3%83%AA%E3%82%B7%E3%83%BC%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6/>
17. DALL-E 3のアドバンステクニック - LOGICALYZE Web Lab, 4月 25, 2025にアクセス、
<https://logicalyze.com/dalle3-advanced-guide/>
18. OpenAI、人気のジブリ風画像生成機能をAPIで提供開始 - ITmedia AI+, 4月 25, 2025にアクセス、
<https://www.itmedia.co.jp/aipplus/articles/2504/24/news121.html>
19. 「ジブリ風」画像生成は問題? GPT-4o画像生成の利用爆発と課題 ..., 4月 25, 2025にアクセス、
<https://www.watch.impress.co.jp/docs/series/nishida/2002461.html>
20. 米オープンAIが画像生成を革新、「ジブリ風」表現に著作権の懸念(米国) - ジェトロ, 4月 25, 2025にアクセス、
https://www.jetro.go.jp/biznews/2025/04/76b6d577ceef4ebc.html?_previewDate=null&_previewToken=&revision=0&viewForce=1&_tmpCssPreview_=0%2F%2Fbiznews%2F%2Fevents%2F%2F%2Fbiznews%2F%2Fbiznews%2F%2Fbiznews%2F%2Fbiznews%2F
21. 【AIの著作権侵害に触れてみた】世界がジブリになる日 “自分で作る時代”の終焉と生成AIの世界: 創造の民主化がもたらす静かな革命 | #超知性ASI時代のDX企画書のネタ

帳 | 近森満 - note, 4月 25, 2025にアクセス、

<https://note.com/7777777777/n/ncf1ac68200ee>

22. チャットGPTの“ジブリ風”画像変換は著作権侵害か？欧米で話題の生成AI機能が物議 ...「風 ... - FNNプライムオンライン, 4月 25, 2025にアクセス、
<https://www.fnn.jp/articles/-/850348?display=full>
23. AI生成画像：現実性と倫理的課題の探求 - Aidiotプラス, 4月 25, 2025にアクセス、
<https://aidiot.jp/media/ai/ai-generated-image/>
24. 生成AIと著作権問題：事例や侵害リスク、ガイドラインを徹底解説, 4月 25, 2025にアクセス、<https://axia-company.co.jp/column/seisei-ai/>
25. AIと著作権の問題！イラスト・画像生成や機械学習の適法性について解説, 4月 25, 2025にアクセス、<https://kigyobengo.com/media/useful/3370.html>
26. ChatGPTにGPT-4oでの画像生成機能が実装されスタジオジブリ風のミーム画像が大量生成されるようになり著作権問題が浮き彫りに - GIGAZINE, 4月 25, 2025にアクセス、<https://gigazine.net/news/20250327-openai-viral-studio-ghibli-ai-copyright/>
27. 画像生成AI「Midjourney(ミッドジャーニー)」とは？始め方・初心者向けの使い方・活用事例を解説, 4月 25, 2025にアクセス、
<https://gen-ai-media.guga.or.jp/glossary/midjourney/>
28. Midjourney(ミッドジャーニー)の使い方、プロンプトのコツを徹底解説！ - AI総合研究所, 4月 25, 2025にアクセス、
<https://www.ai-souken.com/article/how-to-use-midjourney>
29. 【クオリティ調整】EasyNegativeV2の使い方と検証【Stable Diffusion】 - note, 4月 25, 2025にアクセス、<https://note.com/solabou/n/nbf3cb356cf93>
30. 【画像生成AI】Stable Diffusion派生モデルを利用・公開するときはライセンスに注意しましょう - note, 4月 25, 2025にアクセス、
<https://note.com/hases0110/n/n69b8a5784750>